

東家所蔵「マリア十五玄義図」の調査

付, 京都大学所蔵「マリア十五玄義図」旧蔵家屋の調査

Report on Investigation and Research Activity

神庭信幸・小島道裕

はじめに

大阪府茨木市千提寺の東家が所蔵し、同地に建つ茨木市立キリシタン遺物史料館に架蔵されている「マリア十五玄義図」は、神庭他 [1998] で先に報告した京都大学所蔵の「マリア十五玄義図」(原田家本)(註)と共に、日本において製作されたキリシタン絵画を代表する遺品の一つである。両者を同様の方法で調査し、比較検討することによって、より多くの知見が得られると考え、特定研究「生産と利用に関する歴史資料の多角的分析」南蛮関係資料班では、この東家本の調査を希望した。幸い、所蔵者でキリシタン遺物史料館長でもある東藤嗣氏および関係各位の御協力をいただくことができ、同史料館において、やはり東家所蔵・同史料館架蔵の聖人像と共に、1997年7月7日・8日の二日間にわたり調査を行うことができた。この他、原田家本「マリア十五玄義図」が発見された同市下音羽所在の原田家の家屋についても、同家の御好意で民家調査を行うことができたので、合わせて報告することとしたい。

(註) 平成13年6月22日付官報において本作品が重要文化財に指定される旨の告示があった。指定名称は「紙本着色聖母子十五玄義・聖体秘跡図」一面となっている。本報告では従来の名称をそのまま用いることとする。

1 伝来と研究史

(1) 「発見」まで

東家本「マリア十五玄義図」が世に知られるようになったのは、1920年(大正9)9月26日の、藤波大超・橋川正による調査からである。藤波は千提寺の近村である安元の寺院の出身で、当時やはり近村である忍頂寺の小学校の教員であった。橋川は京都帝国大学国史科に在学後、このころ大谷大学教授となっている(『歴史と地理』28-4(1931年)所載の橋川の略歴によれば、同年7月国史科卒、9月真宗大谷大学教授)。藤波はこれより以前から千提寺の墓地を調査し、同年2月には東藤次郎氏の案内によって、慶長8年(1603)の銘を持つキリシタン墓碑を発見し、橋川にも報告していたが、その後、東氏が「まだこの他にお見せする或物があるとのこと」であったため、橋川と共に、9月に千提寺を訪れたものである[藤波 1923]。一行は、墓碑調査の後、土地所有者(ただし、「中頃」に買得という)である東家を訪問した。橋川の記述によれば、次のようであった。

老人父子は快く予等を迎へてくれた。野趣ゆたかな午餐を享けた後、予は切支丹に関する遺物の有無を質してみた。有るやうだとはかねて藤波君から聞いてゐたので、その機会を捉えやうと思つたからである。この家は現在臨済宗の門徒で、仏壇には釈迦仏の木造が安置されてゐるが、段々話して居ると、昔から物置の隅に秘密のものが伝へられてゐることがわかつた。老人父子は予の請に応じてその秘密の品々を出してこられた。[橋川 1921]。

そして、メダイ、木彫キリスト磔刑像、銅版画などの遺品と共に、「油絵風の絵画二軸」すなわちマリア十五玄義図と聖フランシスコ・ザビエル像が「発見」されたのであつた。これらの遺品は、同年10月1日の大坂毎日新聞で報ぜられ、橋川 [1921] によって以上の顛末と資料の概要が学界に紹介された。

(2) 研究史

京都帝国大学考古学教室では、これ以前から京都市内付近の墓碑などのキリシタン遺物の収集・調査を進めていたが、これらの遺物についても借用して写真撮影を行い、1921年4月24日には、浜田青陵・新村出が現地を訪れ、遺物の調査と聞き取りを行っている。

そして1923年には、『京都帝国大学文学部考古学研究報告第7冊 吉利支丹遺物の研究』の一部として、新村出「撰津高槻在東氏所蔵の吉利支丹遺物」が刊行された。東家本「マリア十五玄義図」については、この報告で全体および部分の写真が掲載されると共に、内容の解説、歴史的評価がなされ、今日に至るまで最も基本的な研究文献となっている。画像については、この図が左下より始まり右下に終わる、「喜び」「悲み」「栄福」各五つずつの玄義（ミステリヨ）を表し、それが吉利支丹の間に伝誦されていた「ロザリオの十五箇条」などと合致することが指摘されている。「マリア十五玄義図」の名称も、ここで初めて付けられたものと思われる。

絵画自体については、新村は「図様粗雑なれども古拙愛すべく、彩色は幼穉にして、顔料は在来の泥絵具を用ひたり。人物遠近印影など手法に西画の影響をとどめたれど、幼穉なる本邦吉利支丹画家の作品として亦一史料となすに足らん。中央聖母の頭上に絞られたる幔幕の有様も日本風に見ゆ。粉本に拠りて描かれしものなることは言ふまでもなし。」としている。

この点については、前出 [神庭他 1988] の坂本報告にもあるように、絵の筆者はイエズス会のセミナリオなどで教育を受けた日本人画家と考えられることや、また中央の聖母子像は、福井で発見されたフランスの銅版画家トマ・ド・ルーの作品が粉本であることなどが西村貞 [1945] などによって指摘されている。ただ、製作者については、原田家本マリア十五玄義図および東家で発見されたザビエル像と同一であるとする西村貞と、同一であるかは不明とする坂本等で意見が分かれている。また、製作年代についても、西村は慶長期(1596~1615)に比定するが、福永重樹氏は、ザビエル像について、「S・P (聖父)」という称号を根拠に1623年(元和9)の列聖以後とし [福永 1972]、坂本は逆にこれを下限とするなど一致を見ないが、いずれにしても17世紀前半であることは確実であろう。

この他、マリア十五玄義図自体の研究については、坂本 [1998] を参照されたい。

(3) 伝来について

この「マリア十五玄義図」は、先述のように、現大阪府茨木市、旧三島郡清溪村大字千提寺の旧家東家において「発見」されたものだが、そこに至るまでの伝来の事情および歴史的背景について

若干触れておきたい。

新村出の報告では、東家での伝来について次のように記されている。

東氏がいかにして祖先より之を伝紹せしかにつきての記録もしくは口碑は全く闕けたり。唯予等が訪問の際当主藤次郎氏より聞きし所に由れば、伝来の大切なる箱三櫃ありて、その中の一個に、かの吉利支丹遺物ども存したるなりとか。この筐櫃棟木にくくりつけてありしが、柴など堆積して所在わからざりしとも云へり、明治時代一たび火災に罹りし事ありしと云へば、建物も古からず、同家にては、紋には梅鉢を用ゐて天神を信仰し、宗旨は曹洞宗に循へりと云ふのみにて、吉利支丹伝統の如何を揣摩するに足るべき資料なきに似たり。尚東氏に就きて聞く所によれば、近隣の見山、音羽等の村々にも教徒の後裔ありといふ、他日更に調査のすすめらるゝ機あるべし。(新村 1923)

後に「音羽」の「教徒の後裔」の家の一つから発見されたのが原田家本マリア十五玄義図であり、それについては後述するが、明治時代の「火災」について現当主の東藤嗣氏の御教示によって補足すれば、この火災は明治 26, 7 年頃のこと、それまでは家屋の場所も、現在地とは異なり、更に奥にあった。大きい家だったという。櫃が棟木にくくりつけてあったというのはこの元の家で、その後現在の蔵に曾祖母のイマさんが持ってきてあったものを、藤波氏らに見せた、ということの由である。橋川の「物置の隅に秘密のものが伝えられている」という記述は、このことをやや誤解したものである。

この点については、1981 年発行の『キリシタン遺跡と巡礼の旅』にも関係した記述がある。

……(墓碑) 発見者の藤波氏はその後も調査を続け、たびたび東家を訪ねては、当時信者であった 82 才の東イマさんに先祖代々に伝わる遺物を拝ませてもらえるように頼んだが、イマさんはなかなか承諾されなかった。しかし長男の東藤次郎さんの説得により、1920 年(大正 9 年) 9 月 26 日にこの「あけずのひつ」が持ち出された。……この「あけずのひつ」は東家の元家のかまどの上の屋根裏に三個吊り下げてあったが、東宅火災の際にイマさんが持ち出したのを、近所の人たちが知らずに三つのうち二つを灰と一緒に捨ててしまったという。……東藤嗣氏の母のゆたさんによると、この「あけずのひつ」は先祖代々引き継がれ、年に一度雨戸を閉めて外に気を配りながら、中にあったロザリオ十五玄義図等を拝み、祈ったのだという。

東藤嗣氏によれば、曾祖母のイマさん(天保 8 年 = 1837 年生まれ)は、オラショをとなえたり、氏神にちなんで床の置物にしていた天神像の十字を拝んだりしていたという。

マリア十五玄義図が年に一度拝まれていたというのは、発見時の破損の状態からはにわかに信じがたい点もあるが、実際に、1925 年(大正 14) 逝去のイマさんの代までキリシタン信仰が伝えられていたことは確か、当時調査にあたった藤波大超氏は、次のような記録を残している。

本年(註: 1923(大正 12) 年) 6 月 28 日東藤次郎氏及某家の老婆の口碑を聞くべく訪れたのであった。ところが某家の老婆は余の注文に対して左様なことをお話ししては差支はありませんかとの反問を繰返された。以下問答的に話を記載することにする。(註: 「東藤次郎氏の老母」は先述の東イマさんであり、「某家の老婆」は、先に引用した『キリシタン遺跡と巡礼の旅』によれば、東イマさんより一歳下の中谷糸さんであると思われる。)

問、此所(千提寺)の昔吉利支丹宗を信じてゐた戸数はどれくらいありましたか、又現在ほど

の宗旨を信じてみますか。

答、それは十軒余りでした、大抵は禪宗（曹洞宗）でしたが、たった一軒法華宗の家がありました。

問、徳川幕府が信じてはならないと厳禁したについて何か聞きませんでしたか。

答、無論私の生前から信じられていたのですから、私の若い時分にも大変それは厳禁されていましたが、この事（吉利支丹宗）については隠すだけ隠しましたものですが、方法に苦しんで沢山に吉利支丹宗に関する書物や道具を焼いたり、埋めたりしました。私の家でも同じようにいたしましたから今残っているのはあの人（マリヤの油の絵の像）だけです。

（後略）

東藤次郎氏の老母は厳禁について次の如く話されました。

答、このこと（吉利支丹宗）がやかましくとめられますまでは、毎年寒が明くと仏様（キリスト及マリヤ）に餅を供へて知ってゐる者（同信者）のみ寄合つて仏様（同前）のある家を一軒一軒おがみにまはりました。ところがだんだん信じることをやかましく止められるので、祀ることを止めました。然しそれまで（厳禁）は縁組と云へば下音羽（大阪府三島郡見山村大字下音羽）とばかりとしたのですが、後はそれ（吉利支丹宗）を信じてゐることを隠して他の部落と縁組しました。これは吉利支丹宗を信じない人を嫌ったからです。さう云ふことでこの子（東藤次郎氏）の小さいときなどはお祖母さん（東藤次郎氏の祖母）が祀るときにそばへでも行きましたらそれはそれはやかましく云はれました。

（後略）〔藤波 1923〕

マリヤ十五玄義図がいつまで礼拝に用いられていたかは確認できないが、このようなキリシタン遺物が——厳密に言えば「遺物」としてではなく——当事者たちには存在が知られており、実際に用いられてもいたことがわかる。原田家本マリヤ十五玄義図についても、後に記載した家屋調査によれば、建築は18世紀中・後期ころと見られ、従つて屋根裏に秘匿されたのはそれ以降のことである。こうしたキリシタン遺物は、相当な期間使用され続けたものであり、近世初期の弾圧と共に秘匿されて忘れられ近代に入って発見されたのではないことに注意する必要がある。

なお、「曹洞宗」とあるのは下音羽の高雲寺檀家であることを指すと思われ、東藤嗣氏からも、キリシタンであった家は高雲寺檀家が多い由の御教示を得た。千提寺には寺院はない。

2 調査目的および方法

(1) 目的

本調査は、諸処の事情により作品を国立歴史民俗博物館に移動することができなかったために、顕微鏡あるいは非破壊分析装置などを使用した従前の方法での調査を実施できなかった。特に、顕微鏡による絵具表面の拡大観察が行えなかったことにより、原田家本マリヤ十五玄義図の調査で明らかになった黄色絵具の特徴との比較、さらにエミッシヨグラムによる顔料の推定は今回見送らざるを得なかった。

本作品は発見後に修理が施されてしまっているために、原田家本のような表装の痕跡は現在全く残っていない。したがって、作品の現状から製作されて以降、修理を受けるまでの伝来の状況を作

品を通じて推定することは困難である。しかし、幸いにも発見当初の状態が写真として記録されていることから、表装の内容に関しては多少の検討が可能であると考えられる。本調査は、使用された顔料、下描き、絵具の塗り重ね方、明暗の表現などの観察から、原田家本との関連、そして西欧絵画技術との関係を明らかにするのが主たる目的である。

(2) 方法

本調査は、化学分析を行うための微量サンプルの採取は行わず、作品に対して非接触・非破壊の方法によって調査を実施した。

画像分析では、1) 可視光線を用いた画面および裏面の通常の写真撮影、2) 画面の接線方向(真横)から可視光線を照射して資料の凹凸を観察する斜光線写真、3) 近赤外線を用いて下描きの存在や顔料の種類を推定する赤外線写真撮影、4) 紫外線を用いて後世の補彩や材質の劣化箇所を明かにする紫外線蛍光写真、5) 顔料の推定、絵具の厚さ、描画手順などを確認するために低いエネルギーのX線を用いたX線透過撮影などを行った。撮影には可能な限り8×10inchの大判フィルムを利用し、記録の情報量を可能な限り多くした。

3 結果

(1) 表具について

東家本マリア十五玄義図は、現在は額装として、茨木市立キリシタン遺物史料館に常時展示されている。額はごく新しいものだが、絵画に施された裏打ちなどは比較的古く、東藤嗣館長によれば、発見後に高槻の表具師が行ったものの由である。現在絵の周囲には、縞状の凸凹のある布が貼られているが、これは、同時に発見されたザビエル像の一時期のガラス写真乾板(写真43 京都大学蔵。現在はさらに修復・再表具されている。)にも同じものが見られ、両者が「発見」後に同一の表具師によって修復・再表具されたものであることがうかがえる。ザビエル像を記録したガラス乾板の撮影の日時あるいは指示した人物などについては判然としないが、「原田家本マリア十五玄義図」の調査にあたった浜田青陵等[浜田1935]によって同時に撮影されたのではないかと推定される。「原田家本マリア十五玄義図」の発見が昭和5年(1930)、浜田等の調査報告が昭和10年(1935)になるので、発見後10~15年を経た状態ということになる。東家本の現状はその当時の修理のままであると考えることができる。

従って、本来の表具については、発見後ほとんど手の入っていない原田家本とは異なり、現状からうかがい知ることが困難である。しかし、幸いなことに、『吉利支丹宗遺物の研究』には、発見直後の、修復・再表具される以前の写真が掲載されている(写真44)。これによれば、絵の本紙は、亀甲の中に菊花がある模様の紙(唐紙か)に貼られていたことがわかり、写真では周辺部は見えないが、新村出も「亀甲形の紙に貼付せるものにして、表装を施さざる掛物として……」と記述していることから、やはり掛軸装ではなく、単に紙に貼付してあったのみのものである。右端に見える破損の状態から、下方から上方へ巻かれて収納されていた時期のあることがわかるが、本紙にはこれよりも細かい横方向の折れが多数見られ、また本紙の中央には縦方向にも折られていた痕跡があるが、亀甲紋の紙の方には特にそうした痕跡は見られない。更に、本紙右下には絵の外側にも若干紙があるようで、これらのことは、この亀甲紋の紙に貼られる以前に、何らかの別の表装に

仕立てられていたことを示唆していると思われる。詳しい経緯は不明だが、強い横皺から考えれば、また原田家本や、東家伝来のザビエル像（写真45）・聖人像（写真46）も掛軸装で発見されていることからしても、掛軸装で使用されていた時期が長かったのではないかと推定される。しかし、それも当初の形であったかは不明で、原田家本の報告の際にも推測したように、祭壇画として製作された可能性を考えることもできよう。

縦方向の折り目については、上記の推定通りなら、掛軸装の時期と亀甲紋の紙に貼付された時期の間で付いたものといえる。この縦方向の折り目が大きな破損の一つの原因になっているが、しかしよく見ると、現状では大きく本紙が欠けている下段の聖餅の右側付近は、発見直後の写真ではやはり本紙はなくなっているようだが、白くは写っておらず、裏打ちなどそれなりの修復がなされているように見受けられる。現状では黒く塗られている聖母子像のマリアの顔の部分も、発見直後の写真でもやはり黒く写っている。意図的に塗りつぶしたという解釈もあるが、むしろこれも、破損を補うための一種の修復の痕跡ではないかと思われる。

いずれにしても、このマリア十五玄義図は、長い使用期間の間に様々な変遷を経ていることを十分に考慮すべきであろう。

(2) 本紙について

画面の大きさは縦84.2cm、横67.1cmである。画面左側「喜びの5景」の第5景「神殿でのキリスト（ラヴィたちとの議論）」、および右側「栄光の5景」の第1景「復活」の場面を横切る位置に、本紙の継ぎ目が観察できる（写真2）。X線透過写真にも継ぎ目に生じた並行な断劣の線が明確に記録されている（写真39）。本紙の紙の繊維に関しては、本紙の表面が観察できないのでわからない。

現在の仕立ての詳細は明らかではないが、総裏と呼ばれる裏打ちは三枚の和紙を上下方向に継ぎ足して施されている。X線写真には、画面中央やや上と画面下方に画面を横切る白色の線が見えるが、これが総裏の和紙の重なりに対応する映像である。肌裏や増し裏などは外側から観察できないためにわからないが、画面横方向から光を照射した斜光線写真（写真4）には、画面左側「喜びの5景」の柵目の右端を縦方向に走る盛り上がりが見えることから、それらの裏打ちの継ぎ目に相当するものと考えられる。

(3) 汚損

発見当初の画面にあった強い巻きぐせは現在見られないが、画面上方から光を照射した斜光線写真からは、画面を横切る凹凸の変形が残っているのがわかる（写真5）。

画面中央を縦断する破損によって「悲しみの5景」第3景茨の戴冠、カーテンの中央、マリアの頭部から腹部、ホスチアの右背景部、イエズス会章右下部が失われている。また、画面左上隅の悲しみの5景のうち、第1,2景も部分的に失われている。発見当初の写真と比較すると、マリアの頭部に相当する黒い部分の面積が現在のほうが広がっているなどの多少の違いはあるものの、基本的には変わっていない。赤外線写真（写真34）あるいはX線写真を観察する限り、黒く塗りつぶされた部分にマリアの頭部が残っているとは考えられない。X線写真には、カーテンを背景にした聖母子の左側下の方に、周囲と形や透過率が一致しない小片が白く映し出されている。聖母子の背景とは一致しないことは明らかであるので、聖人の背景部の一部が紛れ込んだものと考えられる。

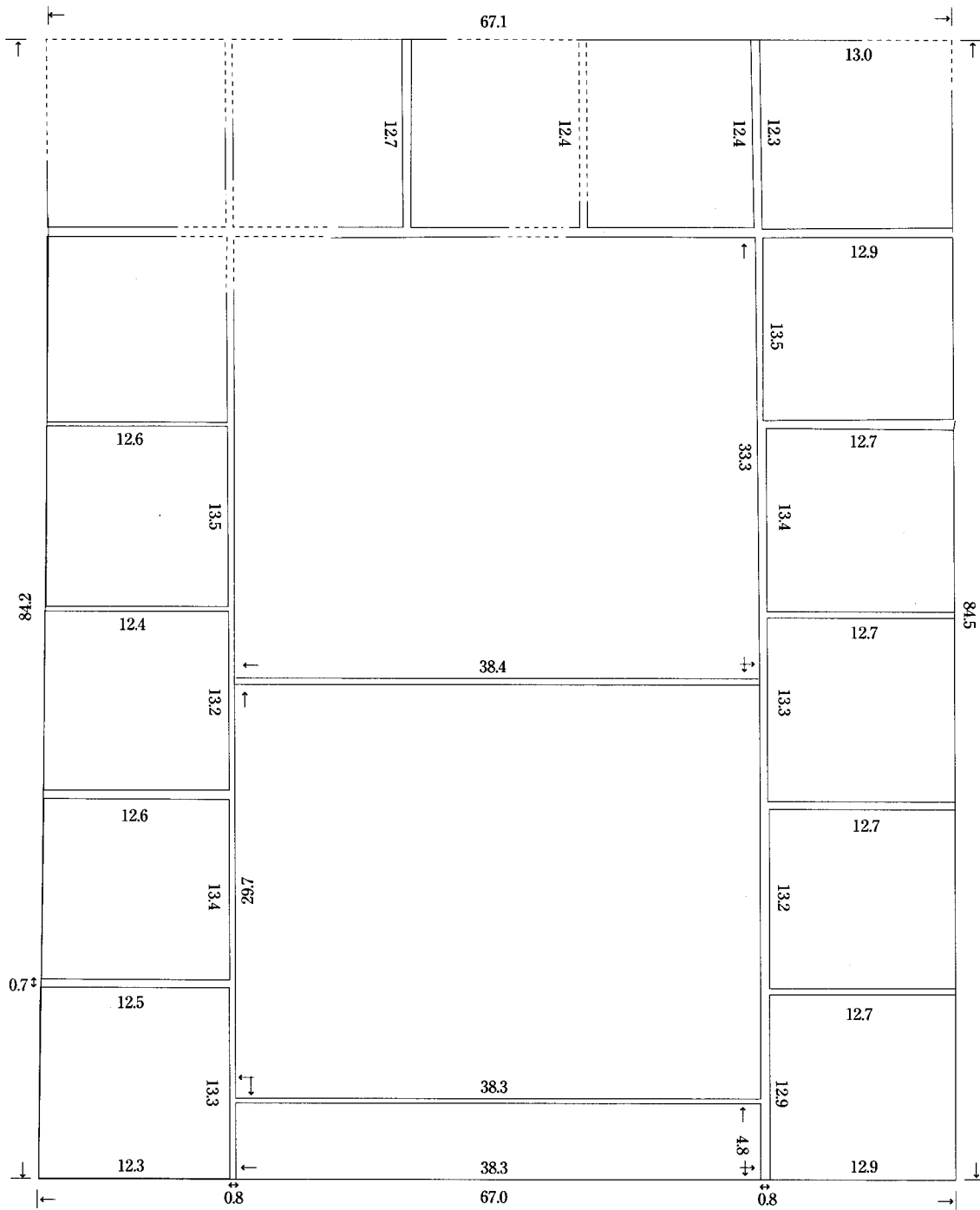


図1 東家本マリア十五玄義図の画面寸法

近接すると人物の顔に小面積の剝落部があることが分かるが、絵具の剝落は比較的少なく、絵具と本紙との接着状態はほぼ良好であると考えられる（写真7～29）。

東家本と原田家本を比較すると、前者の画面は黄色の色調が薄れて、全体的に青色が強く感じられる色調を呈している（写真1）。特に、中央上段のキリストの衣、聖母子の上部にあるカーテン、右側「栄光の五玄義」の空の黄色の彩度が弱く感じられる。また、それぞれの場面を区分する直線は白っぽい青色であるが、原田家本では岩緑色の緑青と推定した。東家本の線が緑青である可能性は小さいが、当初の色彩が原田家本と同様に緑色であったとするならば、青と黄色の絵具の混色であったと考えることができる。しかしその根拠となるものは画面に残存していない。東家本はキリシタン遺物史料館の展示室に常設展示してあるため、窓を通して間接的に入る外光と蛍光灯による展示照明に長期間さらされているために、絵具の変色が進んでいると考えられる。特に、黄色系の絵具は影響を受け易く、退色し易い。

(4) 描画方法

墨線の枠とその線に囲まれた青の下には、所々に各場面の彩色が連続しているのが見えることから、作品の最終段階でそれらが描き込まれたものであると考えられる。

顔や手足などの肌の部分には、鉛白と推定される厚い顔料層が塗られているものと考えられ、近赤外線に対して不透過であるために近赤外線写真では下図の線を確認することはできない。しかし、絵具の剝落部の下に墨の線が明確に確認できる部分がある（写真13）。一方、青色や赤色の衣服については輪郭やひだの線を観察することができる。原田家本の線描と比較すると線は単純な動きで、かつ勢いに欠ける印象を受ける。

赤色の衣服を表現するために、朱（パーミリオン HgS）と推定される赤色顔料を用いているようであるが、衣のひだの陰影部をどのような方法で作りに出しているのかについては、未確認である。原田家本では、パーミリオンの上に透明な赤色絵具を塗り、その透明層によって赤色が濃く深みを増して見える彩色方法を用いている。2種類の絵具を直接混色しないで、透明色を上重ねることによって混ぜ合わせたように見せる方法をグラッシーと呼び、代表的な西欧絵画の技術である。

人物の顔の部分を見ると、目鼻口などを単純な墨線で描いている。原田家本では、淡い墨線と共に透明な臙脂色の線が随伴するように引かれ、立体感が得られるような彩色法が採用されている。この点において両者は基本的に異なる彩色法で描かれていると言える。

中央部の聖母子および聖人の首を除く部分、文字の形、イエズス会章などは原田家本の図像とほとんど一致することから、手本となる何らかの原図が存在していたことを伺わせる。一方それに比較すると、周辺の各場面はかなりの自由度が与えられている。

聖母子の背景と二人の聖人の背景とをX線写真で比較すると、聖母子の背景の方が透過率が高く、墨などの黒色でのみ彩色されている可能性が高い。一方、聖人像の部分の背景は墨と鉛白など、白色を混色したグレーの色調である。

(5) 絵具

顔料の主成分の化学分析を今回行えなかったため、顔料の色彩およびX線写真、赤外線写真の映像を比較しながら顔料種類を推定した。

白色あるいは白色を多く混色した彩色部分は、X線の吸収が大きく、X線透過写真では白く写っている。このような特徴を示す白色顔料としては、鉛を主成分にもつ鉛白（塩基性炭酸鉛 $2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$ ）を考えることができる。ただし、鉛を主成分とするとしても、塩化鉛、炭酸鉛などの塩基性炭酸鉛以外の鉛化合物の可能性もある。

中央上段の聖母子を囲む黒色の背景、下段の人物を囲む灰色の背景、ロヨラとザビエルの黒色の衣服、十五玄義第9図のキリストの右側の兵士の衣服などは赤外線完全に吸収して黒く写っているので、油煙あるいは松煙などの炭素（カーボン C）の特徴を示している。下段の人物を囲む灰色はX線を吸収しているので、炭素と鉛白を混ぜたものであろう。人物などを描いた下描きの線も赤外線を吸収しているので、炭素であると推定する。

画面各所にみられる朱色は、鉛白と同様にX線の吸収が強く、かつ赤外線をよく透過することから、朱（パーミリオン HgS ）と考えられる。赤色の着衣のひだを表現するために陰影部に塗られた濃い赤色は、明るい朱色と同様に赤外線をよく透過するので、茜あるいは燕脂などの天然有機染料（レーキ Lake）と考えられる。

文字や光（ハロー）あるいはイエズス会章は、やや透明感を伴った黄色に感じられる。観察した倍率が十分ではないために、絵具表面の表情を確認することはできないが、艶、亀裂のパターン、クレーター状の気泡の跡などの特徴を見ることができる（写真10,11）。一方、幼児キリストの黄色の着衣やカリスの黄色はそれに比較して不透明な印象を受け、色彩的にもやや濃い黄色である。

第1図の天使が持つ百合、2図の衣服、3図の天使の羽、5図のラビの衣服、6図の樹木、11図の鎧、12および13図の人物の衣服などに緑色の絵具が見られる。X線の透過率は比較的低く、また赤外線に対する透過率もやや低いことから、岩緑青（マラカイト $\text{CuCO}_3 \cdot \text{Cu}(\text{OH})_2$ ）であると推定した。

着衣の主要な色彩として各所に使用される青色は、顔料としては一種類であろうと考える。総ての部分で、X線あるいは赤外線の透過率が非常に高いことから、天然植物染料の藍（インディゴ）であると推定する。着衣のひだの部分や画面を区切る青色の線が、X線透過写真で不透過に写ることから、藍に鉛白を混色して明るい青色としていると考えられる。

4 考察

(1) 歴史的背景

この地方にキリシタンが多く集住し、信仰も良く保たれたことの原因としては、二つの可能性が考えられよう。一つは、高槻を中心とする高山領の信徒が弾圧を避けて山間部のこの付近に移住した、というもの。もう一つは、それ以前から、この地でキリシタン信仰が盛んであったというものであるが、結論としては、基本的には後者とみなすべきと思われる。

まず、当地は山間僻地の印象を持たれやすいが、前近代、特に中世においてはそれは当てはまらない。この地方は、高槻方面から丹波の亀岡方面へ抜ける交通路の一つにあたっており、隠れ里的な山村ではない。下音羽の原田家も、この街道に面している。また、下音羽付近まで出ると相当な耕地があり、鎌倉期から忍頂寺の寺辺村として史料にも現れ（『茨木市史』）、早くから開発された地域である。

千提寺より南には中世山城「栗栖山城」があるが、これは村田修三氏の御教示によれば、道を押さえることを意識し、人質曲輪と考えられる特殊な部分を持つ特徴ある山城で、在地土豪の手によるものではなく、城主のレベルを超えた政治関係が予想され、築城者としても三好政権時代ないし高槻時代の高山氏などが考えられると言う。この付近は高山氏の本来の本拠地である高山にも近く、高山領内でも一つの中心的な部分だったと考えられる。

東家本・原田家本マリア十五玄義図も、具体的にどこで製作されたかは別として、外部から持ち込まれたというよりも、この地方に栄えたキリシタン文化の証であると見るのが妥当であろう。

(2) 作品の位置付け

2枚の和紙をつなぎ合わせた本紙と、それらの繋ぎ目の位置、下描きの線の存在や形、文字やイエズス会紋章などの図像、聖母子および頭部を除く聖人の図像と背景部の関係、藍、パーミリオンなどの絵具を用いた彩色法など、東家本は多くの点で原田家本と一致する特徴をもつ。特に、両作品の中央部上下段の人物の輪郭は極めて近い関係にある。ただし、十五玄義各図の細部の図像は正確に一致しないところが多い。

人物の顔の描き方などを両者で比較すると、原田家本では淡い墨線に透明な臙脂色の線が随伴し、立体的表現を意識しているように考えられるが、東家本では単純に濃い墨線で輪郭線が描かれている。この相違がもたらす効果は大きく、原田家本と東家本では人物から受ける印象が異なる理由の一つはここにある。

下描きの線は両者の作品ともに存在するが、東家本の線は原田家本（写真38）に比較すると明らかに技量的な面で劣っていると言える。

以上のように基本的な図像は類似しているのも、同じ指導者のもと、あるいは手本を用いて製作されたと考えてよいのではないだろうか。しかし、描画技術や技量に相違点も多く見出せることから、原田家本の作者の方が東家本よりも優れた製作者であると考えてよい。神戸市立博物館が所蔵する聖フランシスコ・ザビエル像の調査から〔神庭 2000〕、原田家本マリア十五玄義図と聖フランシスコ・ザビエル像は類似の特徴を備えているが、東家本はこれらの作品とはやや特徴を異にする点をもつと考えられる。

付、原田家の家屋について

原田家本マリア十五玄義図は、現在も原田家がお住まいの家屋の屋根裏から1930年（昭和5年）4月に発見されたものだが、言うまでもなく、屋根裏に秘匿された時期は、建物が建てられた時期より後であり、家屋の築造年代が判明すれば、絵が秘匿された時期の上限を確定することができる。逆に言えば、それまでは何らかの形でマリア十五玄義図が使用されていた、ないしは少なくとも存在が知られていたことを証明できたことになる。また、家屋の規模や構造から、マリア十五玄義図を使用、少なくとも最終的に秘匿した人物の階層などについて何らかの手がかりが得られる可能性もある。

こうした理由から、我々は原田家の民家調査の実施を希望したが、幸い御快諾をいただいて、1997年7月9日に調査を実施することができた。まず発見当時15歳でその場に居合わせた原田一吉氏から何うことができたお話を交えて、伝来と発見の事情について記しておきたい。

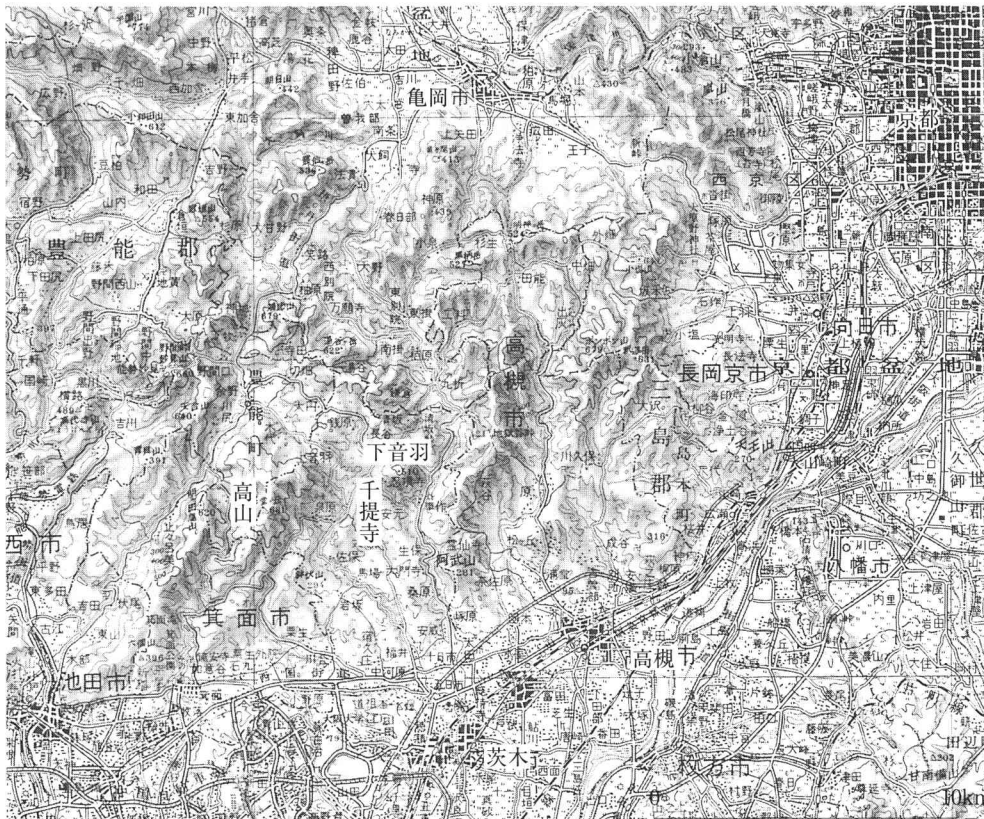


図2 千提寺・下音羽の位置
(20万分の1地形図「京都及大阪」1980年発行に加筆)

原田家は、下音羽集落の南端、現在もかなり交通量の多い街道沿いに位置している(図2,3参照)。もっとも現在の街道は新しく、本来の街道は家の反対側の山沿いの道で、アカサカと通称している。茨木と亀岡を結ぶ街道であった。下音羽は、特に町場的な要素はないが、東家のある千提寺にも多くの檀家を持ちキリシタン墓碑も残る曹洞宗の高雲寺があり、また旧見山村役場も置かれていた近隣の中心集落である(図30,31,32)。

家の所有者は、浜田青陵[1935]の記述では、原田辰次郎氏(現当主原田一吉氏の父君)が入居する以前は原田藤太郎氏の家であり、同家はキリシタン教徒の旧家であった、としているが、原田一吉氏によれば、原田藤太郎氏も誰かから家を買ったもので、家の持ち主は二度代わっている、とのことである。いずれにしても、直接この家およびマリア十五玄義図に関する伝承は全く絶えている。ただ、この家は金の茶釜か何かが埋まっている(ので売ってはいけない、あるいは、だから金が入らないなど)と以前から言われていた由である。

マリア十五玄義図が発見されたのは、1930年(昭和5年)4月23日[藤波1931]、屋根の葺き替えの際のことである。屋根葺きの時は、上に6人くらい、下にも同じくらい的人数がおり、原田一吉氏は、発見の時は茅を下から上へ渡す中間の役をしていた。絵の入った竹筒は手伝いの人が見つけた。屋根の丸太材の補強であるかのように、藁縄で二重に4ヶ所ほどくくりつけてあったが、蓋が付いていたのでおかしいと思い、発見となった由。割竹なので、藁縄を切るとすぐに開き、下へおろして皆で見た。高山右近関係のキリシタンがいたことは知っていたから、キリストの絵があ

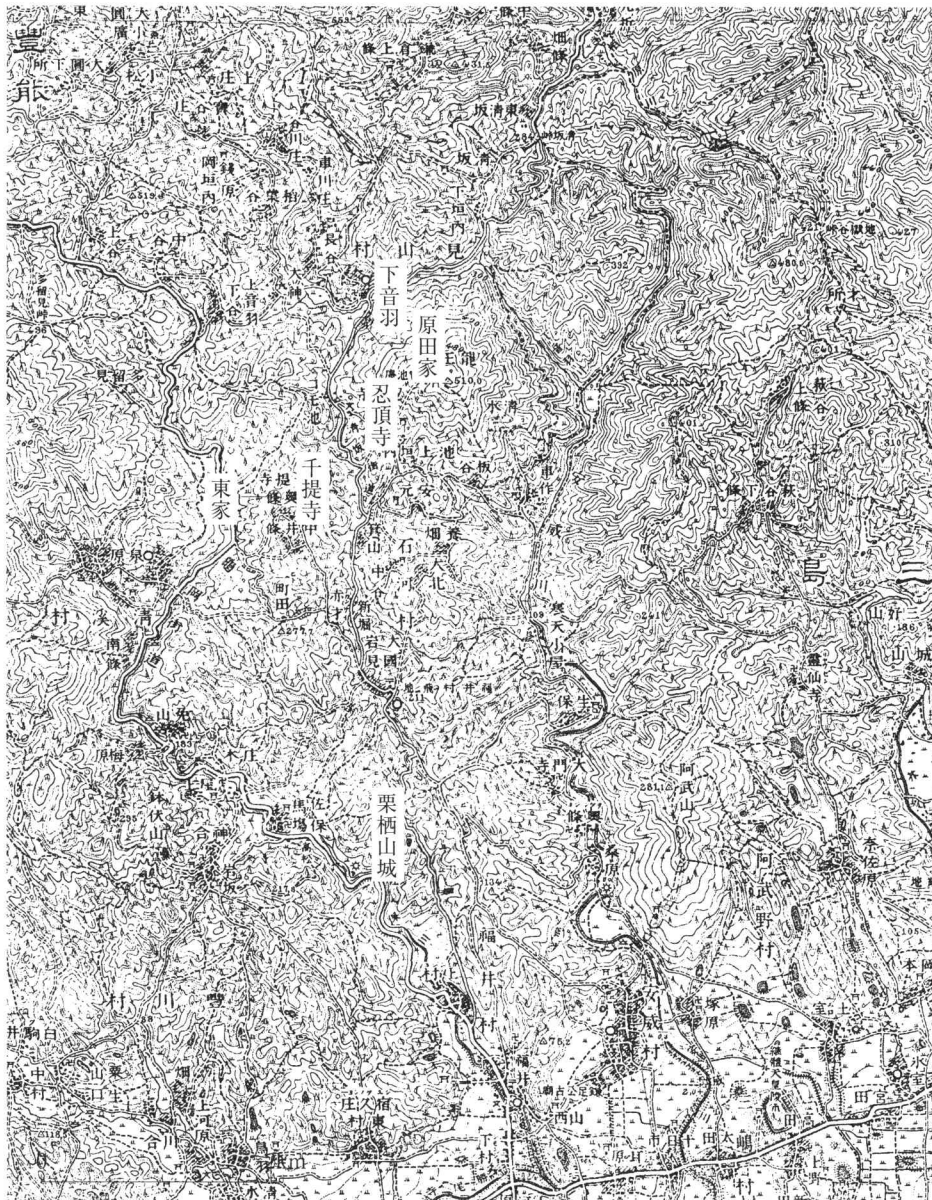


図3 千提寺・下音羽付近
(5万分の1地形図「京都西北部」1917年発行に加筆)

るので、そういうものとすぐに分かった。離れに居た学校の先生が、学校で同僚だった藤波大超氏に話したところ、藤波氏が飛んで来た。見せてくれという人が多いので見せているうちに傷んできて、手におえないので京大に譲った、とのことである*。原田一吉氏は、右上のキリスト磔刑図の血の滴りを特に印象深く覚えておられた。

*原田家の客間には、昭和6年7月10日付、原田辰次郎氏宛ての、「瑪利亞十五玄義図入竹筒」の寄贈に対する京都大学総長新城新蔵の感謝状が飾られている。

屋根の葺き替えは、1930年の後、1947~48年頃行ったのが最後で、20年ほど前にトタンをかぶせた。従って、屋根の木材は基本的に当時のままであり、マリア十五玄義図の入った場所を、今も

確認することができる（写真 33）。

そして、濱島による原田家家屋の調査結果は次の通りである。

「桁行 7 間，梁間 4 間半，入母屋造，茅葺（現在は鉄板で覆う），中規模の直屋で，平面はこの地方に一般的な整形 4 間取り型。

建築年代は改造があって明らかでないが，18 世紀中・後期か。」

従って，屋根裏に秘匿された年代も，ほぼ 18 世紀中葉以降ということができ，キリシタンが表向きはほぼ消滅した 18 世紀代（19 世紀代の可能性すらある）にまでこの絵が使用，ないし少なくとも認識されていたことは注目に値しよう。

また，家屋の規模や性格についても，この地方の一般的なものであり，目立った特徴を持たないことが逆に興味深い。少なくとも最終的な使用者（秘匿者）は特別な階層でなかった可能性が高く，さらに言えば，この絵もまた必ずしも特別なものではなく，類品がある程度一般的に存在していたであろうことを示唆することになると思われるからである。

参考文献

- 橋川 正 1921「北摂より発見したる切支丹遺物」『史林』第 6 巻第 1 号
 新村出・浜田青陵他 1923『京都帝国大学文学部考古学研究报告第 7 冊 吉利支丹遺物の研究』，岩波書店（1923），
 刀江書院（1926），臨川書店（1976）
 藤波大超 1923「吉利支丹遺物発見の動機及び行事について」『歴史と地理』第 12 巻第 3 号
 藤波大超 1931「新たに発見せられたるマリア十五玄義図に就いて」『歴史と地理』第 27 巻 5 号
 浜田青陵 1935「原田本マリア十五玄義図」『宝雲』第 13 冊
 西村 貞 1945『日本初期洋画の研究』，全国書房
 西村 貞 1958『南蛮美術』，講談社
 藤波大超・免山篤他 1969『茨木市史』，茨木市役所
 福永重樹 1972「聖フランシスコ・ザビエル像」に就いての考察『切支丹研究』第 14 輯
 坂本満・吉村元雄 1974『南蛮美術』，小学館
 喜田哲他 1981『キリシタン遺跡と巡礼の旅』，愛心館
 神庭信幸・小島道裕・横島文夫・坂本満 1998「京都大学所蔵「マリア十五玄義図」の調査」『国立歴史民俗博物館
 研究報告』第 76 集
 神庭信幸 2000「国立歴史民俗博物館特定研究南蛮関係資料研究班による神戸市立博物館所蔵「聖フランシスコ・ザ
 ビエル像」の調査に関する概要」『神戸市立博物館紀要』

〔調査参加者〕

・調査には，神庭信幸（現東京国立博物館企画部，元国立歴史民俗博物館情報資料研究部），小島道裕（国立歴史民俗博物館歴史研究部），濱島正士（同情報資料研究部）が主としてあたり，武田恵理（東京芸術大学大学院美術研究科修士課程），井口智子（現名古屋ボストン美術館学芸部，元東京芸術大学芸術資料館）が補佐した。8×10 写真の撮影は勝田徹（国立歴史民俗博物館資料課）が担当した。

・このほか，下記の特定期研究員，調査協力者の各位より，随時御教授・御協力を得た。研究員は坂本満（聖徳大学人文学部），森田恒之（国立民族学博物館），歌田真介（東京芸術大学美術学部），岡泰正（神戸市立博物館学芸課），村上隆（奈良国立文化財研究所），益田宗（元国立歴史民俗博物館歴史研究部），吉岡真之（国立歴史民俗博物館歴史研究部），日高薫（同情報資料研究部），調査協力者は下山進（デンマテリアル株式会社色彩科学研究所），土屋裕子（現東京国立博物

館企画部，元東京芸術大学大学院美術研究科修士課程)。

神庭信幸 (東京国立博物館企画部)

小島道裕 (国立歴史民俗博物館歴史研究部)

(2000年10月20日受理，2001年6月22日審査終了)



写真1 原田家本マリア十五玄義図 (京都大学総合博物館蔵)



写真2 東家本マリア十五玄義図 (キリシタン遺物史料館蔵)

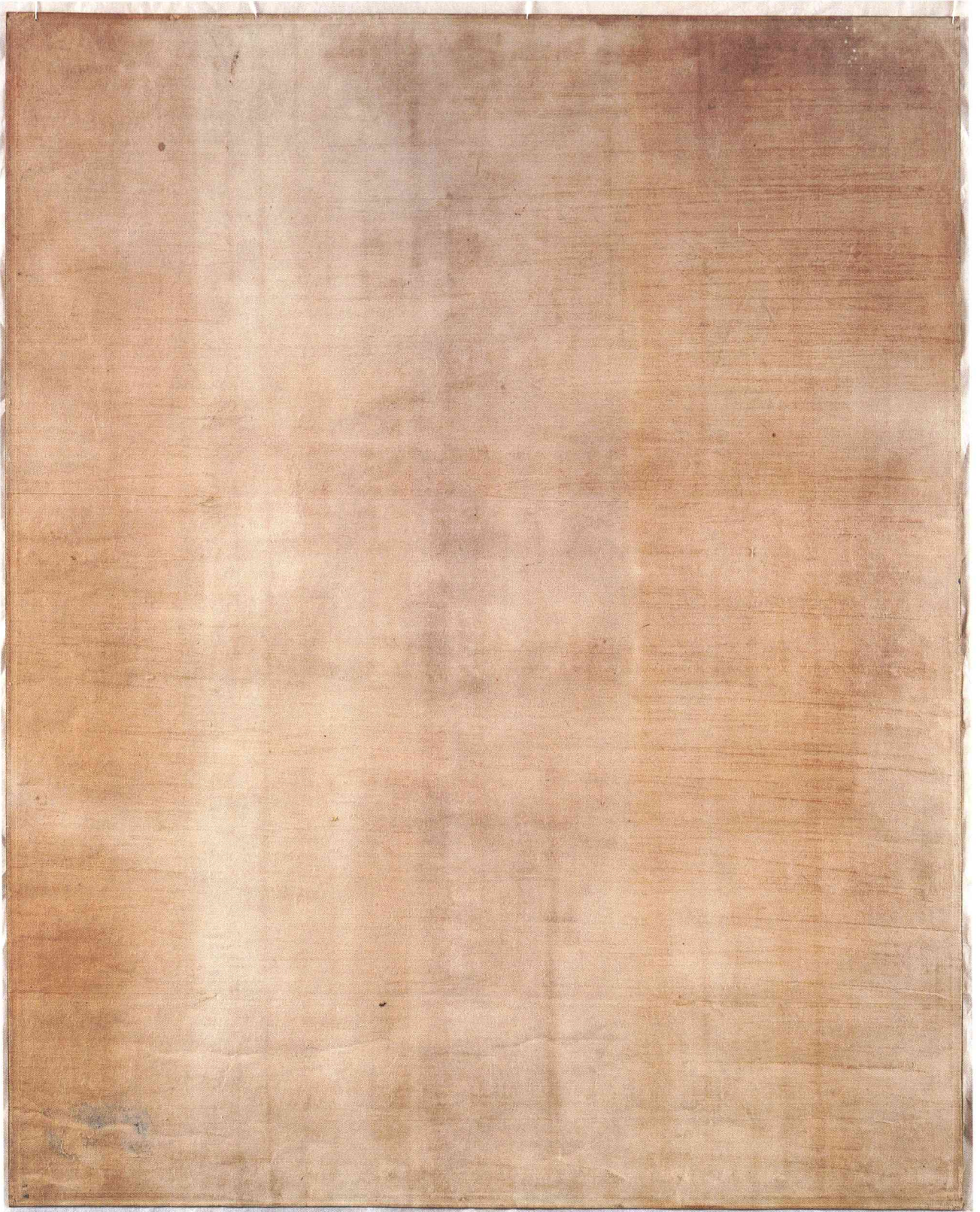


写真3 同図 裏面



写真4 同図 左側からの斜光線写真



写真5 同図 上方からの斜光線写真

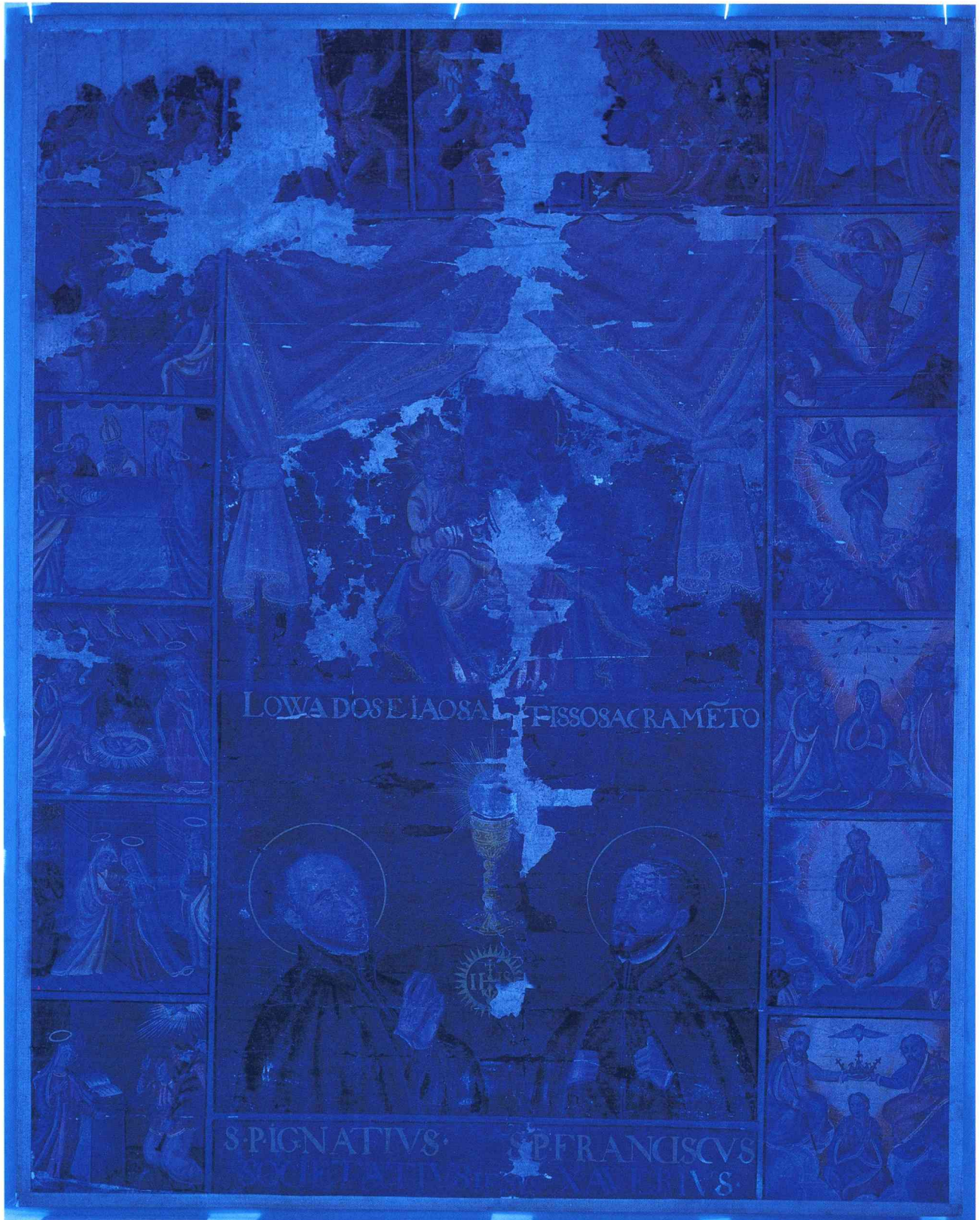


写真6 同図 紫外線蛍光写真



写真7 中央上段, 聖母子のキリストの部分



写真8 中央上段, 聖母の赤い衣部分



写真9 中央上段, 右側カーテンの下端部分



写真10 中央文字, LOWAのA



写真11 中央下段, ホスチアの周囲のハロー部分



写真12 中央下段, ザビエルの左目部分



写真13 中央下段，ロヨラの右手指部分 剝落部に下描きの線が見える



写真14 十五玄義第1図，天使が持つ百合の茎



写真15 十五玄義第1図，鳩



写真16 十五玄義第2図，左側の男の顔



写真17 十五玄義第2図，マリアの顔

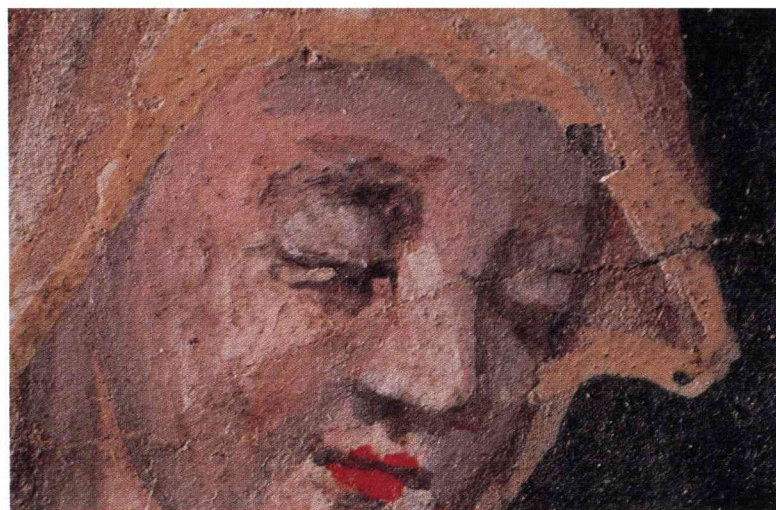


写真18 十五玄義第2図，エリサベトの顔



写真19 十五玄義第3図, キリスト



写真20 十五玄義第5図, キリストの顔

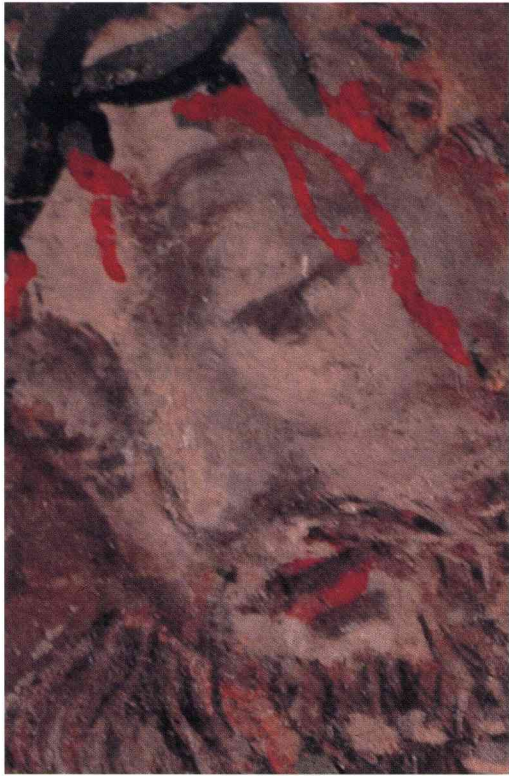


写真 21 十五玄義第 9 図，キリストの顔

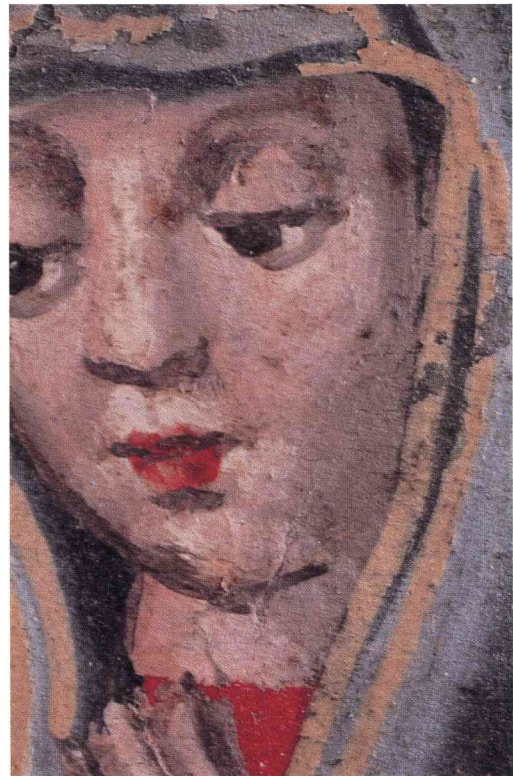


写真 23 十五玄義第 13 図，マリアの顔

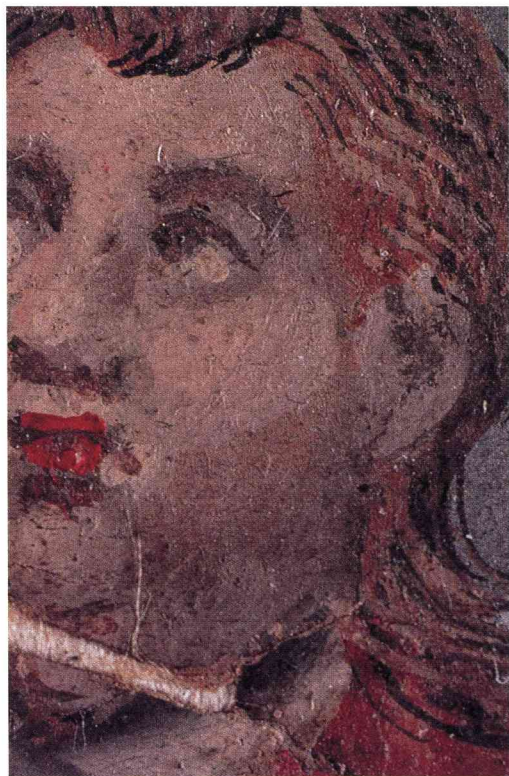


写真 22 十五玄義第 10 図，
ヨハネの顔

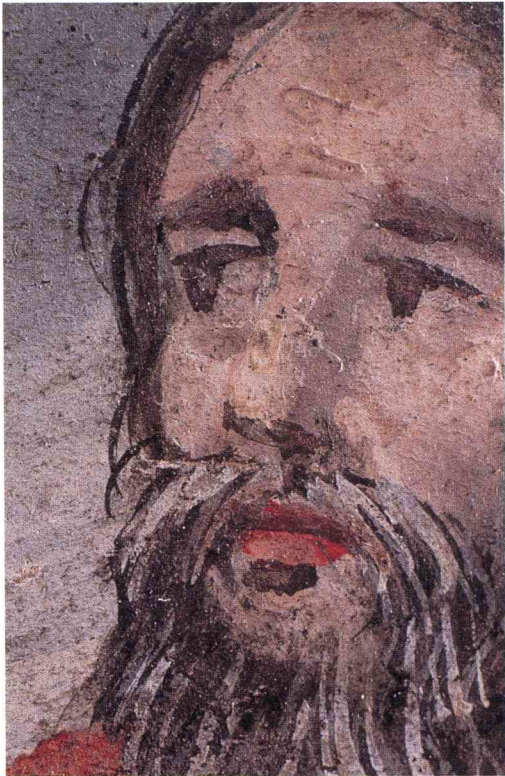


写真 24 十五玄義第 14 図，右下の男の顔

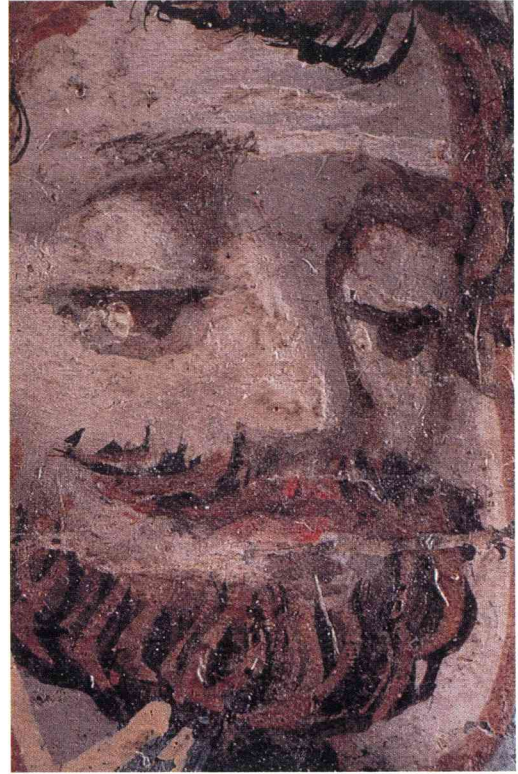


写真 25 十五玄義第 14 図，左下の男の顔

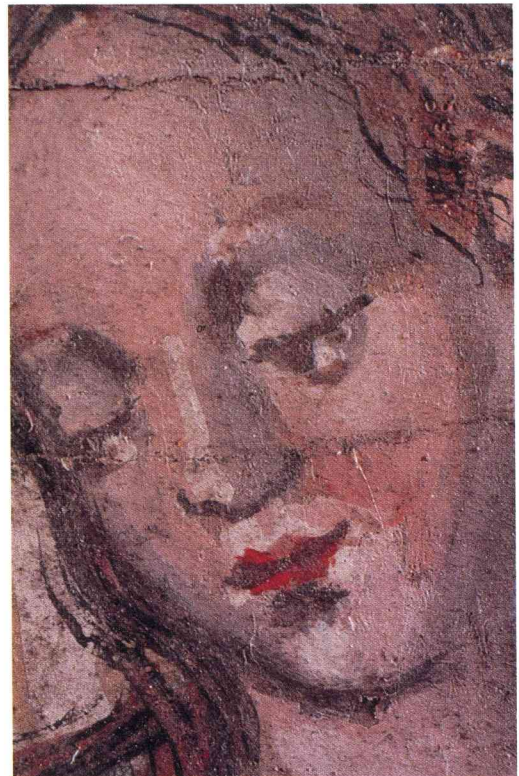


写真 26 十五玄義第 14 図，マリアの顔



写真 27 十五玄義第 15 図，右側の男の顔



写真 28 十五玄義第 15 図，冠部分

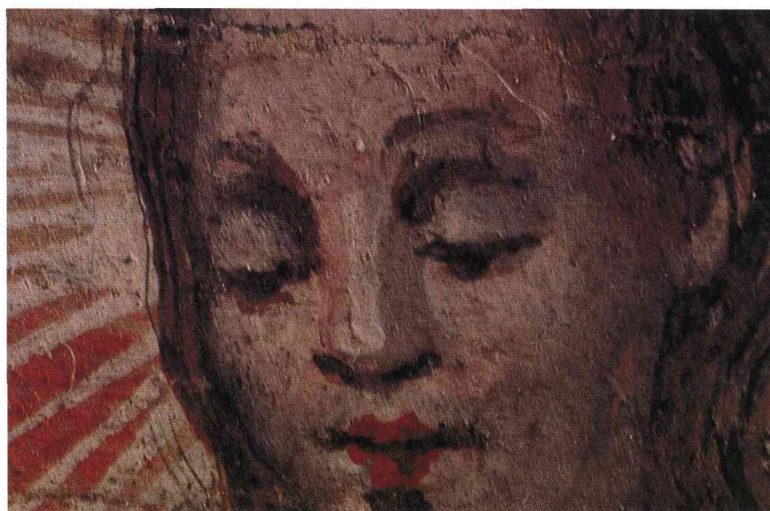


写真 29 十五玄義第 15 図，マリアの顔



写真 30 下音羽の集落（右から2軒目の入母屋が原田家、
左上の白い屋根は高雲寺）



写真 31 下音羽を通る旧街道（中央の入母屋が原田家）



写真 32 原田家（旧街道より）



写真 33 マリア十五玄義図の発見された原田家の屋根裏（中央の木材）

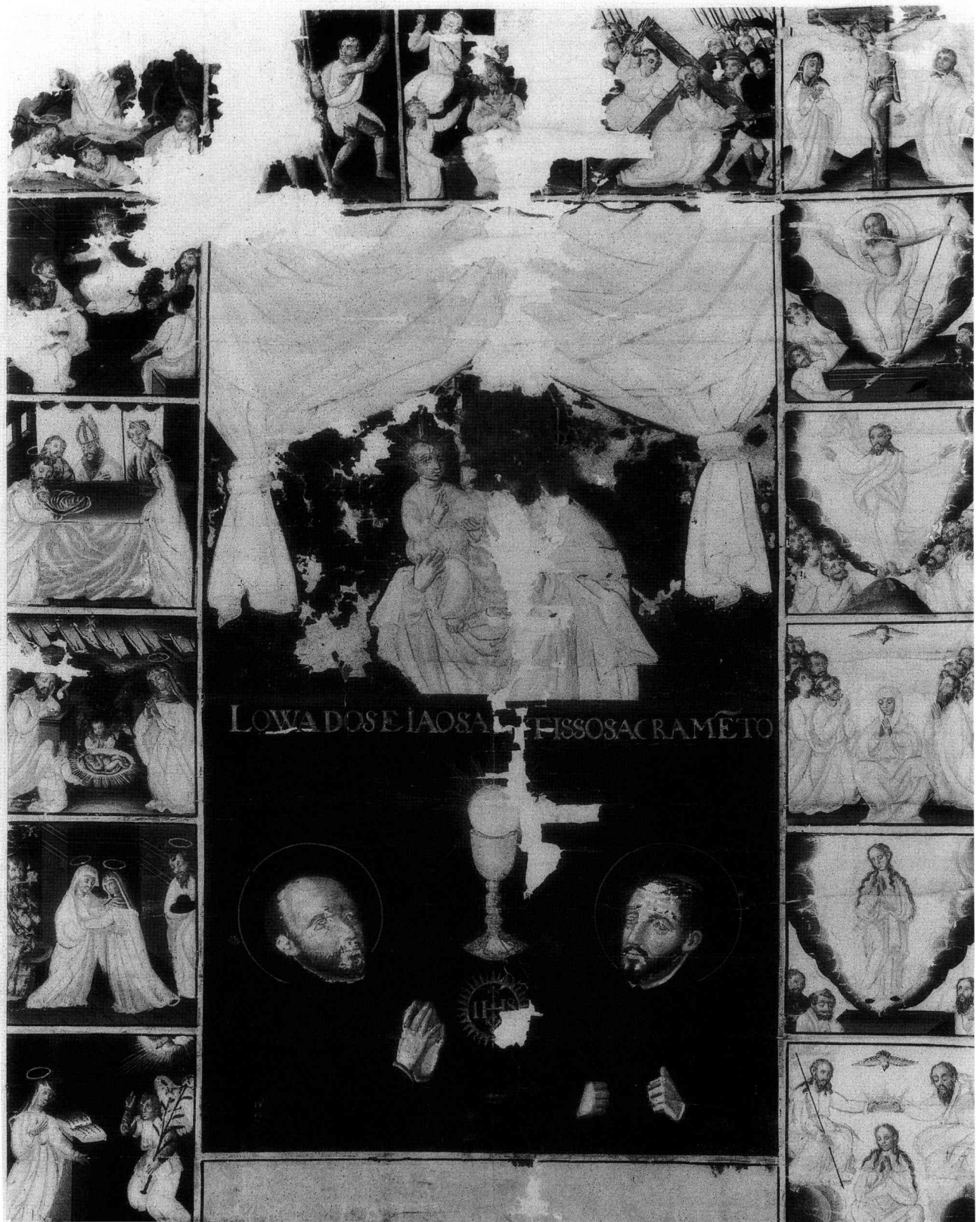


写真 34 東家本マリア十五玄義図の近赤外線写真



写真 35 同写真部分, 十五玄義第 10 図,
マリアとキリスト

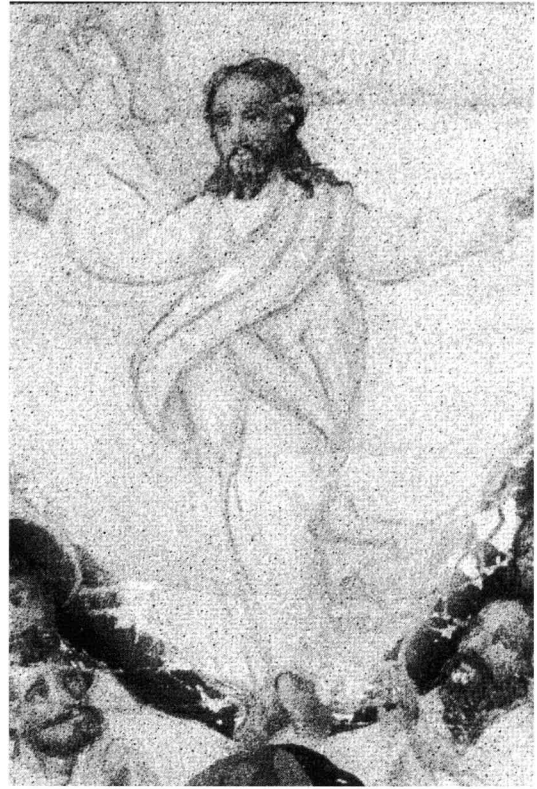


写真 36 同写真部分, 十五玄義第 12 図,
キリスト



写真 37 同写真部分, 十五玄義第 14 図,
マリア



写真 38 原田家本マリア十五玄義図の十五玄義
第 14 図, マリア部分の近赤外線写真

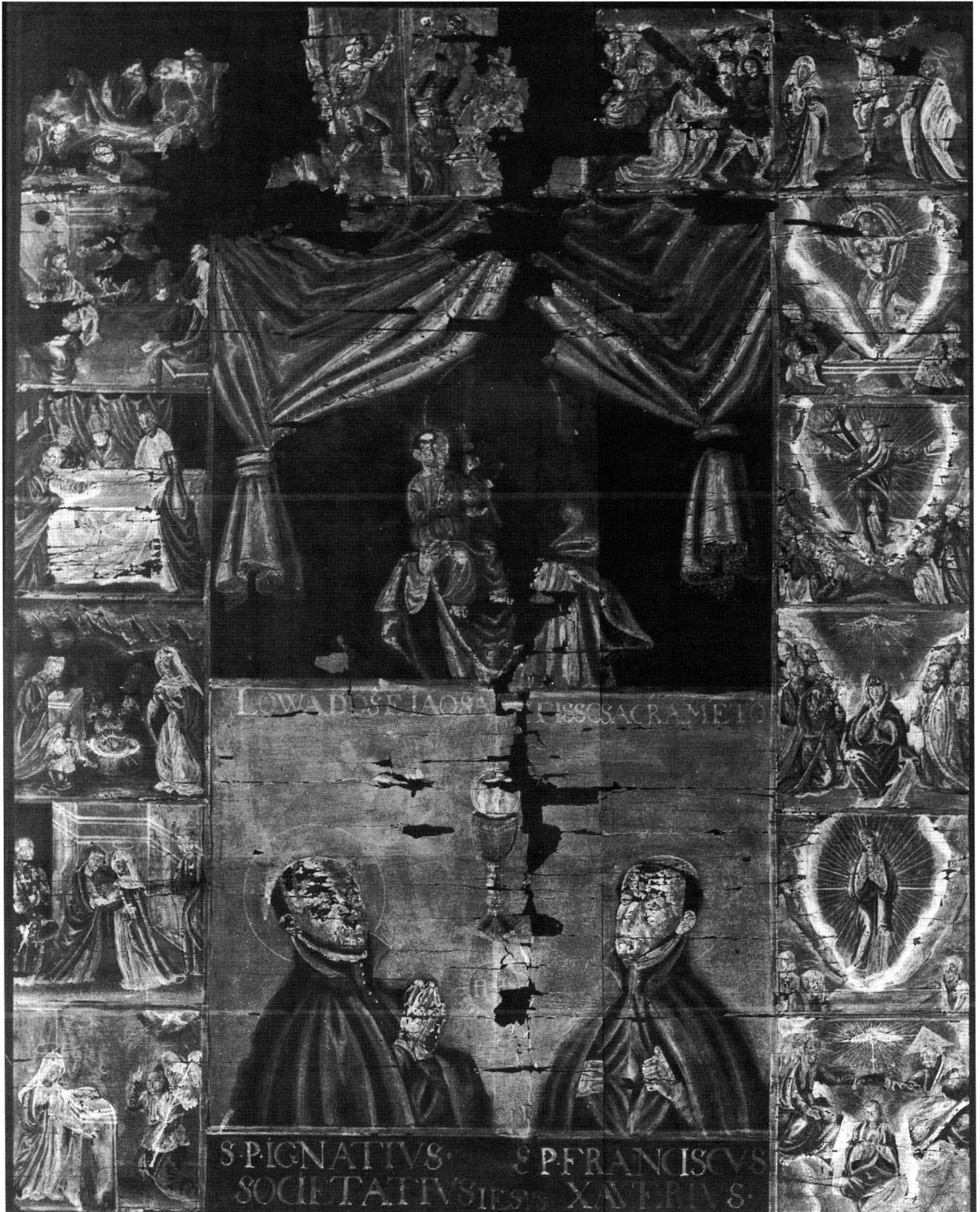


写真 39 東家本マリア十五玄義図の X 線透過写真

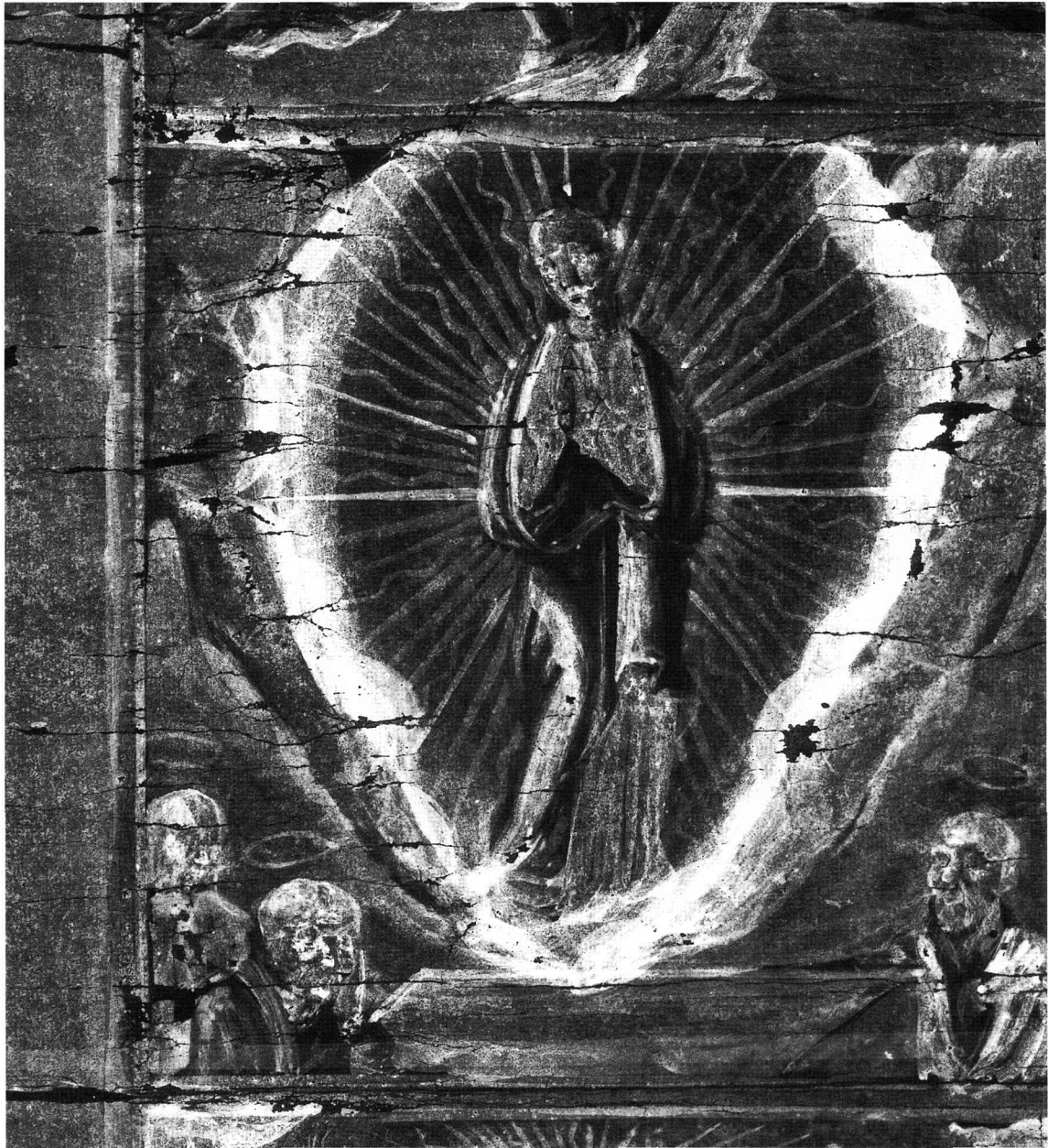


写真 40 東家本マリア十五玄義図の十五玄義第 14 図, X 線透過写真



写真 41 東家本マリア十五玄義図の十五玄義第 15 図，X 線透過写真



写真 42 東家本マリア十五女義図のフランシスコ・ザビエル, X線透過写真



写真 43 聖フランシスコ・ザビエル像（発見後に修理された状態、
京都大学総合博物館所蔵の写真による）

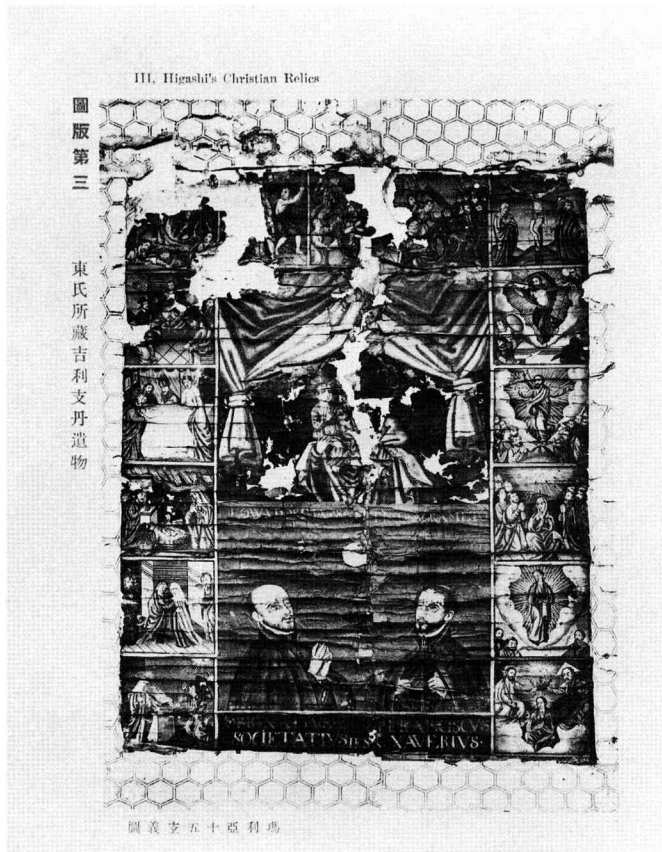


写真 44 東家本マリア十五玄義図（発見当時の状態、『吉利支丹遺物の研究』より）



写真 45 聖フランシスコ・ザビエル像（発見当時の掛軸装の状態、『吉利支丹遺物の研究』より）



写真 46 聖人像（発見当時の掛軸装の状態，下方の竹は収納用の竹筒か、『吉利支丹遺物の研究』より）